

特集に当って

片山 隆仁

「データ数がいくつあれば、見積り関係式が作れますか？」これは、あるセミナーで講師が持ち出した問いかけです。《普通なら数十個のデータから回帰式を作るのだが、まあ単純化したとして、直線で関係式を作るにしても、最低2個のデータが必要だし……》こんなことを頭に浮かべていると、講師は、「私なら1点だけで直線を描くヨ。なぜなら、この関係式は原点(0, 0)を通るはずだから」と話を進めました。非常に乱暴な論議ですが、限られた素材を何とか加工して分析したいと考えていた私にとっては、強烈な印象が残りました。

現実の場でORを活用するに当って、しばしば、1つの問題に直面します。それは、客観データが十分に揃っていないにもかかわらず、限られた時間内に、自らが、またはクライアントが判断するための支えとなる、資料を作り上げる状況に追い込まれることです。こういった場合の処置としては、入手できる主観データを客観化して信頼に足るデータとして取り揃えてみるのが威力を発揮します。このような問題意識をもって、今回の特集を組んでみました。

本誌に掲げている『階層化意思決定法』という和名の響きは、いかがでしょうか。実はAnalytic Hierarchy Process (AHP)を取り上げた第1回目の特集号は86年8月に出されていますが、当時「特集に当って」には、よりこなれた和名があれば募集しますと述べられています。現在までのところ具体的な提案はありません。これについて『階層化意思決定法』が定着していると解釈するかどうかは論議の分れるところだと思います。お隣の中国においては『層次分析法』と呼んでいるそうですが、OR手法のより深い定着をはかり、身近なものとするためにも、今いちど皆様方のご提案ご意見をお待ちいたします。

さて、内容に関することですがAHPの特集号としては2度目であり、読者にある程度の子備知識を期待していることもあって、今回はAHPを入門的に説明した原

稿はありません。もし入門書を必要とされる場合は、前回の特集号を書棚から取り出して目を通していただくか、論文中にある参考文献リストから適当なものを読んでもいただきたいと思います。

本特集号の計4編の論文は、意思決定研究部会(AHP部会)の活動の中から生まれたとも言えます。

第1編目は、CAD/CAMシステムの機種選定について現場で先頭に立って活躍しておられる加藤直孝氏に、AHPとエキスパートシステムとのドッキングを主体にその適用事例を紹介していただきました。実用例としてだけでなく、新しい挑戦として参考になるものです。

第2編目は、権藤元氏、宇佐川雄一氏に簡便性で人気の高いスプレッドシート型ソフトを利用した手法について具体的に紹介していただきました。これを機会にぜひご自分のパソコンにも取り入れて日常的にAHPの利用を試みてはいかがでしょうか。

第3編目は、竹田英二氏に一对比較行列に不完全な要素を許しながら、AHP処理を進めてゆく方法について、わかりやすくするため、数値例をまじえて解説していただきました。これによって情報が不足している場合でも、それなりの取り扱いができることがおわかりいただけるでしょう。

第4編目は、真鍋龍太郎氏にAHP利用上のヒントをまとめていただきました。いわばAHP部会での発表内容・論議を集約したものであり、ここにはなるほどと思いついた要点が含まれていますので、大いに考えさせられます。

昨年9月には、AHPに関する初の国際会議が中国で開催されましたが、特集号を組むに当ってタイムリーな話題なので、会議に参加された真鍋龍太郎・木下栄蔵両氏に会議の内容を報告していただきました。AHPの応用、ツール、理論、利用上の知恵といった側面からの特集論文と併せて、海外事情についても触れることができましたので、本特集号は、AHPをとりまく最近の話題を幅広く提供できたのではないかと思います。ぜひご覧いただきたいと思います。

かたやま たかひと 防衛庁 航空幕僚監部

〒107 港区赤坂9-7-45